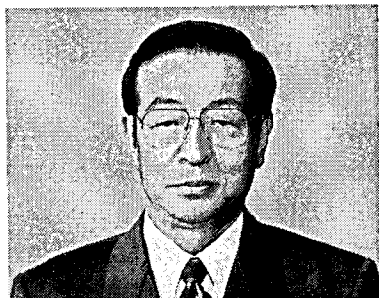


農具の思い出

馬 渕 芳 美



博物館の展示と申しますと、自然や歴史の資料がまず思い浮かべられますが、私は農具などの民俗資料に大変親しみを感ずいます。そこで、農具に関する私の懐かしい思い出を二つほど紹介させていただきたいと思ひます。

今から28年ほど前の昭和42年、私はK農林高校に勤務しておりました。その年は丁度学校創立55周年にあたる年で、記念の式典が挙行されることになりました。私はたまたま「学校農業クラブ」の顧問でしたので、クラブ員の生徒たちと相談し、この機会に「当地方における農機具の変遷」について展示することにしました。

当時は、科学技術の著しい進歩により、農具の機械化がどんどん進展しつつある時期で、それまで使われていた農機具は捨てられたり、納屋の片隅に眠ったりしていました。私たちは、農民の知恵と創意の賜物でありながら、忘れ去られてしまう恐れのある農具を、収集・展示・保存しようと考えたのです。

最初に、趣旨を全校の生徒に説明し、自宅あるいは近所の、もう使われなくなったような農具を借用、できれば寄贈いただけないかと訴えました。その結果、農具は思いのほか色々集まりました。田起こし作業の用具としては、備中鍬、てこの原理を応用した田打ち鍬など。牛馬耕用具としては唐犁・改良犁など。収穫用具と

しては、こぼし、足踏み脱穀機などです。それらの農具を見て、次に生徒達と具体的な展示方法の検討を始めました。配列は時代順を原則とし、さらに変遷の歴史を調査・研究し、説明を加えました。

展示は、大成功とはいかないまでも、充実した取り組みとして好評だったように記憶しています。私は、博物館で農具などのいわゆる民俗資料を見ると、このときの体験を懐かしく思い出し、大変親しみを覚えるのです。

もう一つは、自分のもっと若いころの体験です。私は農家に育ち、よく農作業を手伝いました。ある時、牛を使って田起こしをしたことがあります。父は牛に犁をつけて、難なく田を起こしていきます。しかし、私が父に代わってやろうと思うと、全く思うようにいきません。犁を操ろうにも、まず牛のほうが思うように動いてくれないのです。立ち止まるわ、方向を変えるわで、農作業は全然進みません。私は、焦りを覚え、しだいに腹立たしくなってきました。父はそんな私を見て、

「日ごろから、牛を可愛がっていないからだ」と言いました。それから、私は牛の世話をまめにするようにしたのです。

毎日朝夕の給餌をし、暑い日には牛を牛舎から連れ出し、水で体を洗ってやりました。そうすると、次の季節の農作業のとき、やっと牛は私の思うように動いてくれるようになったのです。私は、農作業のおかげで、人と動物の接し方、いわば人と動物の心の触れ合いのようなものを学んだ気がします。

農具の展示を見ると、このような私のささやかな農業体験もなつかしく思い出します。今は、農家も減り、子供たちが農業を体験する機会もほとんどありません。それだけに、農具など博物館の民俗資料は、先人の努力・工夫を想像するよすがとして、大変貴重であるように思われます。

(岐阜県高等学校長協会会長
岐阜県立岐阜高校校長)

第68回公開講座

「学びと創作の日々」 — 細香の生涯 —

と き 平成8年6月29日(土)
と ころ 大垣市スイトピアセンター
講 師 門 玲子氏



第68回公開講座が、大垣市及び大垣市教育委員会との共催で「江戸の閨秀詩・画人・江馬細香展」記念講演会に併せて大垣市スイトピアセンターで行われました。

大垣市及び大垣市教育委員会、西濃地区公開講座委員の方々のご努力、また、郷土の先賢である江馬細香の名声の高さ、門玲子先生のお人柄などにより、参加者は300人を超える盛況で、通路や廊下に椅子を置いても座りきれない状態でした。

◆
講師の門玲子先生は石川県ご出身の小説家で『江馬細香』（BOC出版、昭和54年）、『江馬細香詩集「湘夢遺稿」』（江馬細香著、門玲子訳注、汲古書院、平成4年）の著者です。

先生は、細香のことを語るのが楽しくて仕方がない様子で、大変張りのある、それでいて優しい声で話されました。90分の講演時間が短く感じられたのみならず、講演の終わった後には、細香についての理解が深まり、細香が好きになる講演でした。

◆
講演は、江馬細香研究の現状から始まり、細香の生涯を漢詩や年表などの資料を用い、エピソードをおり混ぜながら話されました。

古鉢や……

安政2年(1855)細香 69歳

この頃、花見酒に酔って、手水鉢前で転ぶ。

これに対し、頼支峰が細香に送った句

「古鉢や後家がこけ込む水の音」

このようなエピソードを聞くと細香おばあさんのおちょこちよいで、おおらかな人柄が感じられ、親しみを持ってました。

激動の時代

- ・安政5年夏頃 尊王攘夷運動のため幕府に追われる頼三樹三郎をかくまう。
- ・同年9月 三樹三郎・妻紅蘭捕らえられる。
- ・安政6年10月 三樹三郎処刑される。

詩・画人の細香が生きたのは、激動の時代であり、彼女といえども決して時代と無関係ではなかったと感じました。

学びと創作の日々

「偶作」 万延元年(1860) 74歳

吾年七十四 吾が年、七十四

情味冷於灰 情味 灰よりも冷ややかなり

無病身仍瘦 病い無きに 身は仍お瘦せ

綿衣欲窄裁 綿衣 窄く裁たんと欲す

細香の最期の詩作で、翌年の文久元年9月4日早朝亡くなりました。彼女の人生はまさに最期の最期まで「学びと創作の日々」であったことが分かります。

(公開講座委員 岐阜県博物館 富田幸八)



平成8年度

東海地区博物館連絡協議会 総会に出席して 日本博物館協会東海支部

とき 平成8年6月20・21日
ところ 岐阜県美術館

今年度は岐阜県が当番県ということで、“会員相互の連絡と博物館事業の振興をはかる”ことを目的に、神奈川、静岡、山梨、愛知、岐阜の5県の博物館・園・個人会員121名が参加して開催されました。

今年度は、役員の任期交替の年でもあり、また、平成7年度に提出議題となった“博物館の地震対策”について、各館・園の取組みの取りまとめを、前年度当番県の神奈川県から報告されました。



以下、総会の概要を紹介します。

(来賓祝辞)

日本博物館協会専務理事 毛利正夫氏
岐阜県教育委員会教育長 大宮義章氏
岐阜県教育委員会指導部文化課長 武山柁司氏
地域の人々の協力を得て、生涯学習の場として、また地域文化の向上に博物館の寄与するところは大きい、との御挨拶をいただきました。

(表彰)

岐阜県瑞浪市化石博物館 奥村好次氏
氏は、長年の研究とその成果が評価されたものです。

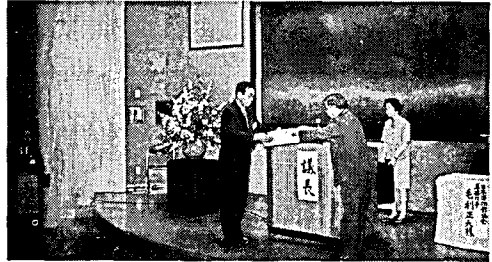
(議事の中から)

・平成8・9年度の岐阜県の理事は、前年度に引き続き次の3名が再任されました。

岐阜県博物館 清水廣美氏
内藤記念くすり博物館 青木允夫氏

飛騨民俗村管理事務所 桜野 功一郎 氏
なお、岐阜県の監事は、任期が7・8年度なので引き続き次の方になります。

郡上八幡民芸美術館 松本五三氏
・平成9年度開催県 静岡県



(講演)

「活気ある博物館となるために」という演題で榎山女学園大学教授・名古屋大学名誉教授で、理学博士の糸魚川淳二氏の講演がありました。



スライドを使用して体験学習参加型の博物館の紹介があり、これからの博物館は、見る側の興味が多様になってきているため、次の点を見直し、自己評価をする必要があると提案されました。
①基本をしっかり ②個性的であること ③積極的であること ④保守的でない ⑤楽しいこと、となかなか厳しい御指摘でした。

(施設見学)

岐阜県美術館 —— 常設展
岐阜県博物館 —— マイ・ミュージアムと県文化財保護センター速報展
関市産業振興 —— 金子孫六氏による関伝日本センター 刀鍛錬の実演

(事務局 岐阜県博物館 古野村美保子)

第34回 会員研修会報告

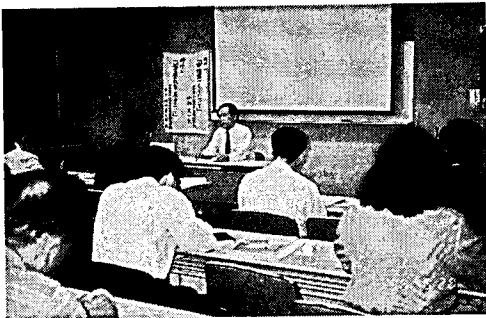
『展示技術の変化への対応』について

第34回岐阜県博物館協会会員研修会が、6月28日(13時30分～16時)、かかみがはら航空宇宙博物館において開催されました。26名の会員の方が出席しました。

『展示技術の変化への対応—新しい展示を求めて』という研修テーマで、かかみがはら航空宇宙博物館館長の小林文一氏、総務課参事の横山晋太郎氏よりお話をいただきました。そのあと見学研修ということで、館内をご案内していただきました。

〈研修1〉「博物館づくりについて」

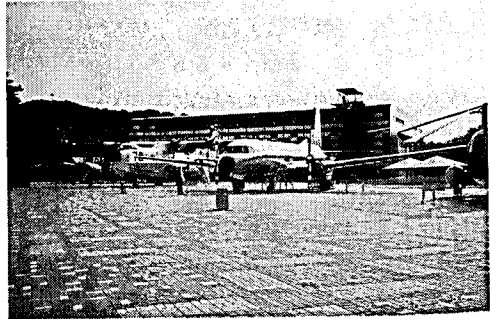
かかみがはら航空宇宙博物館
館長 小林文一氏



かかみがはら航空宇宙博物館は、1996年3月23日にオープンし、6月26日現在で229,372人(開館日数83日)の入館者を迎えました。今回の研修では、開館までの経緯やなぜ各務原に航空宇宙博物館なのかということなどについて、お話していただきました。

1917年(大正6年)、各務原に陸軍の飛行場が開設され、以後、多くの飛行機がこの地で飛行し、試験されてきました。近年では宇宙産業の発展も目覚ましく、さまざまな開発が進んでおり、各務原は我が国の航空宇宙技術開発の中心地であり続けています。そこでこの博物館が誕生したのです。

この博物館では、航空宇宙の歴史を通じて我が国の航空宇宙文化を後世に伝えると共に新しい航空宇宙文化の発信地として世界に貢献することを願っています。



〈研修2〉「航空機の収集・展示について」

かかみがはら航空宇宙博物館

総務課参事 横山晋太郎氏

かかみがはら航空宇宙博物館は、各務原縁の飛行機を中心に日本人がどのような飛行機を創ってきたかをテーマに、実際の機体を見ながら確認し、シミュレータで体験できる博物館です。

航空機の収集について、「なるべく飛行時のままの機体を収集しているが、ただか50年前のものすらないので、戦前のものなどは模型を製作している。我が国の場合、文化としての航空機への理解度が低いので、今後、修復・復元並びに保存技術などを確立していかなければならない」とお話ししてくださいました。

〈研修3〉「航空宇宙博物館の見学研修」

展示場では、各務原縁の航空機の説明をしていただき、体験学習館では、航空シミュレータ「飛鳥」の飛行体験をさせていただきました。



(研修委員 内藤記念くすり博物館 朝倉加代)

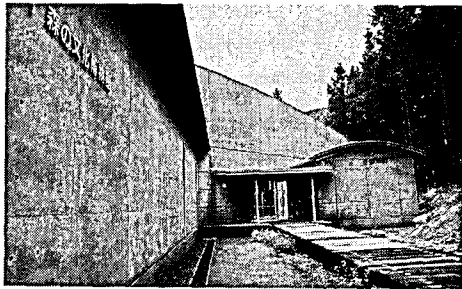
森の文化博物館

〒503-25

岐阜県揖斐郡春日村大字美東 1902-188

TEL (0585) 58-3111

粕川を遡り春日村最奥の集落美東をぬける。人家は途絶え、車1台が通れる道を約3キロ進むと、粕川長者伝説の地、長者平だ。木々のざわめきとせせらぎのささやきのなか、忽然と鉄筋コンクリート一部鉄骨平屋建の博物館が姿をあらわす。都市のなかにあつたとしてもおかしくないモダンなつくり。しかし、地元の方さえあまり足をはこばないこの地において、その建物はなぜか神々しい。



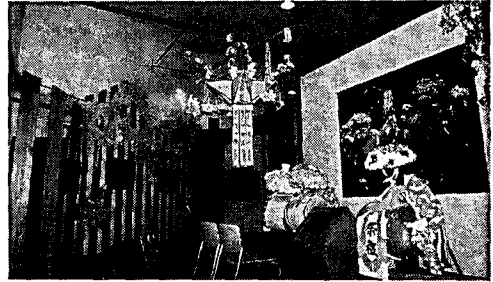
一步館内に足を踏み入れると、そこには透徹した世界が待ち受けている。

探険ランドでは、ブナの一生を、クイズを解いて扉をあけながら進み、学習する。なぜか子供の頃遊んだなつかしいジャングルジムを連想させるが、正解でないと扉は開かず、先には進めない。

ここを脱出すると森のシアターで、定時に「春日村の灯籠祭り」が80インチディスプレイに放映される。薬師堂で1月15日の深夜に競って奪われる大灯籠、それとは対照的な彌宜の厳粛な1年の生活が語られる。あくまで淡々としたドキュメントタッチの画面構成と語り口は、祭りに潜む人々の生の源について、見る者にそっと問いを投げ掛ける。

そして放映が終わり、森の展示室にはいるとともに、私達はその問いをさらに深めるだろう。「森の物語」ではシアターで上演され

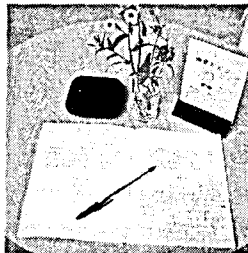
た灯籠のほか、山の神・太鼓踊りなど、神と人との交歓の品々が並ぶ。かつて津島神社前にあり、ここに笹の葉を供えて疫病除けに牛に食べさせたという小さな石皿。何気なく一段高く置かれているが、そこに今でも神は所在しているのだろうか。「森とからだ」では伊吹山をめぐ



る薬草と生業^{なまごい}についてがテーマである。現代の化学薬品と異なり、自然との共鳴を尊ぶ薬草。木の葉をかたどったディスプレイに浮かぶようにしてあらわれる標本。枯れてなお幻想的な美しさは何を私たちに伝えているのだろうか。そして炭焼きと製鉄をテーマとした「森と風の民」実際に再現した炭焼き窯と小屋。それは決して単なる生業の場だけではないようだ。

神々しさ、透徹した世界、人々の生の源・・・これらすべての答えは展示室出入口に掲げられた「森と魂の博物館」のメッセージに凝縮されているようだ。でも、ここではあえて紹介しないでおこう。これは各々の方が展示を実際に見て、それぞれに感じるものであるから。

最後に、喫茶ラウンジに足をほこぶと、テーブルに感想ノートと村の行事を紹介する手作りPOP、そして小さな花が飾られていた。ここで初めて一息つけた。森の国春日村入国のパスポートを得たような気分だ。さて、今後各種行事開催を計画している付属の森の暮らし館に行こうか、隣接の長者の里で遊ぶか、それは皆さんの自由である。

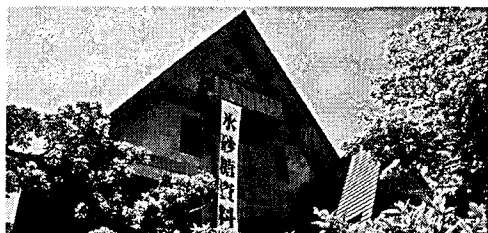


- 設立/春日村
- 開館/
平成7年4月29日
- 開館時間/
午前9時～午後5時
- 休館日/毎週水曜日
- 入館料/
一般 500円
小中学生 250円

(機関紙委員 岐阜市歴史博物館 大塚清史)

氷砂糖資料館

〒503-04
岐阜県海津郡南濃町津屋 2812-100
TEL (0584)57-2711



身近な調味料であるにもかかわらず、その歴史や製造方法が今まであまり紹介されなかった砂糖。そのすべてを知ることができる資料館がここである。

氷砂糖で日本一の市場占有率を持つ中日本氷砂糖株式会社。その創業100周年を迎えるにあたり南濃工場内に設置された当館は、三角屋根が印象的な堂々とした4階建て。正門から入口までの木陰の歩道にはベンチが置かれ、トンボが飛びかう。道端には唐時代の氷砂糖製造模型・昭和27年製クリスタル氷砂糖製造機などの野外展示が効果的に配置されている。館内の展示は小学5・6年生を対象にわかりやすくコンパクトにまとめられている。

入口横には、まずビート糖の原材料のてん菜とかんしょ糖の原材料であるサトウキビの標本。意外な大きさだ。そして階段脇のパネルで人と甘味の出会いを学ぶ。日本伝来は意外に古く8世紀といわれている。そして2階展示室にはシルクロードで売られていたという氷砂糖の復元品や、数々の資料とパネルをもとにした氷砂糖製造工程の今昔、世界の冰糖、一般的な砂糖の種類などが展示されている。ところが意外にも炭酸飲料などの甘味料に使われるぶどう糖や、澱粉を原料とした異性化糖は一切ない。何故ならこれらは糖類であっても砂糖ではないそうである。砂糖とはてん菜やサトウキビから糖분을抽出し、濾過、脱色、結晶化したものである。

この過程の調整によって様々な砂糖のバリエーションが生まれてくる。なかでも氷砂糖は時間をかけて結晶化させるため、あのような大きな粒となる。かつてはすべて人の手で作られていたことを実物大に復元されたムロなどの資料が物語る。これらは全てが自然の恵みと時間のなかでつくられる。そしてサトウキビの絞りかすも燃料や紙として再生されるのである。意外にも砂糖は天然素材で環境にも優しい製品なのである。



3階にあがると中日本氷砂糖100年の歩みとともに、氷砂糖アイデアクッキングのレプリカ、そしてクッキングビデオが登場する。早速家で試作するのも楽しそうだ。そしてLET'S TRY!、砂糖を使ったお菓子、わたあめやカルメラ焼きが楽しめるコーナーもある。

さて、いったい今まで何回「意外」と書いただろうか。「甘い宝石」と呼ばれる氷砂糖。その意外はまだまだたくさん展示に潜んでいそうである。



○設立/中日本冰糖株式会社

○開館/平成6年11月2日

○開館時間/午前10時~午後4時

(但し入館希望者は事前に電話予約)

○予約電話番号/(052)661-0115

○入館料/大人300円・小中高校生100円

(機関紙委員 岐阜市歴史博物館 大塚清史)